

## 243. 長浜市上寺地遺跡の調査(上)

### 1. はじめに

上寺地遺跡は、長浜市北東部の保多町に位置しており、古墳時代から平安時代にかけての集落跡と寺院跡である。これまでの調査では、円筒埴輪、弥生土器、古式土師器、中世土師器、灰釉陶器、瓦片が出土しているが、明確な遺構は検出されていない。周辺遺跡として、東隣に県史跡の垣籠古墳、丸子山古墳群、日向平古墳群があり、北西には柿田遺跡、西に墓立遺跡、南には保多館跡、堀部西遺跡がひかえる。

### 2. 調査について

今回の調査は、農協倉庫建築と公園造成に伴い行われ、調査対象地区約500㎡に、4m×4mのグリッド4カ所と、3m×7mのトレンチを2本設定して、平成7年4月から5月にかけて現地調査を行った。

### 3. 各調査区について

調査では、グリッドNo2より埋没墳と考えられる、断面皿状の形状を持つ溝(周溝)が検出され、その埋土中から多数の円筒埴輪が出土した。周溝は、底部のみの残存であり、上部は後世の水田開発を受け削平されていた。この周溝は、北壁から逆時計回りに弱く弧を描いて、南壁へとのびており、暗茶色土の埋土であった。(第3図上段)グリッドNo3では、墳丘崩落土とみられるものが土層観察によって検出され、南高北低のゆるい地山の斜面が確認でき、その斜面に沿って帯状に崩落土は堆積しており、円筒埴輪片を多数含んでいた。しかし、周溝とみられるものは検出されておらず、北側未調査部分に存在している可能性と水田開発による削平も考えられそうである。(第3図中段)トレンチNo1では、近世における水田開発の痕跡がみられた。少なくとも2次期にわたる近世水田と、廃棄坑とみられるカクランの存在があり、古墳の痕跡はまった



第1図 調査位置図



第2図 調査地周辺図

くみられなかった。また、カクラン塚からは多量の亜角礫と瓦片、陶磁器が出土しており、水田経営から畑作経営に移行した可能性が土層堆積土との違いからうかがえそうである。埴輪はほとんど出土しなかったが、他の調査区のものに比べて磨滅が激しかった。(第3図下段) その他の調査区では、中世の溝とピットがみられ、灰釉陶器なども出土した。

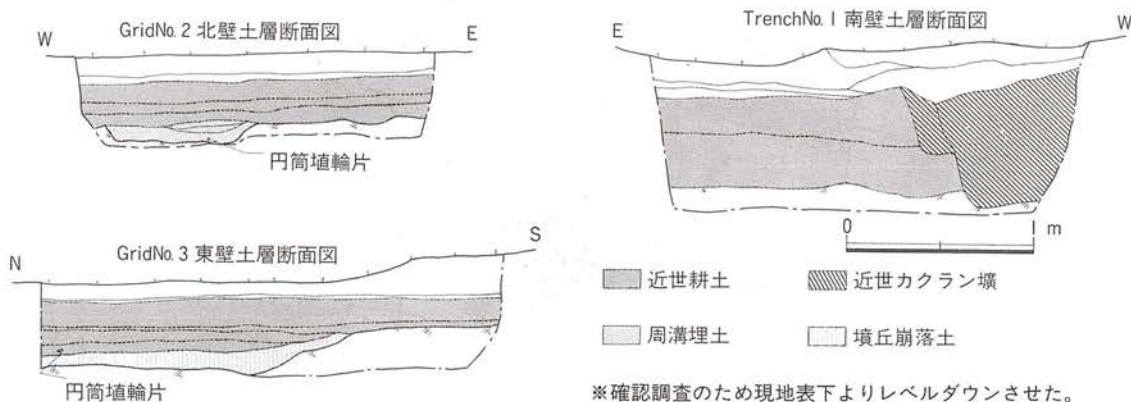
#### 4. 出土遺物

1は、朝顔型円筒埴輪で、受部はラッパ状に開き、端部を丸く納める。2、11、14は、円形のスカシを持つもので、2はタガの直上に施されていたが、11は破片のため不明である。7は2段のタガを有し、上・下タガ間に明瞭なハケメを斜方向に行ったのち、中心部分で直上よりハケメを施したものである。8~10、18、19は赤色顔料が表面に塗られていたもので、8は内面にハケメを施したのちに塗られ、その他は、タガのみに施されたものである。21~26は円筒埴輪の基底部で、21~24は下から上にむかってまっすぐにのび、端部は

られる。

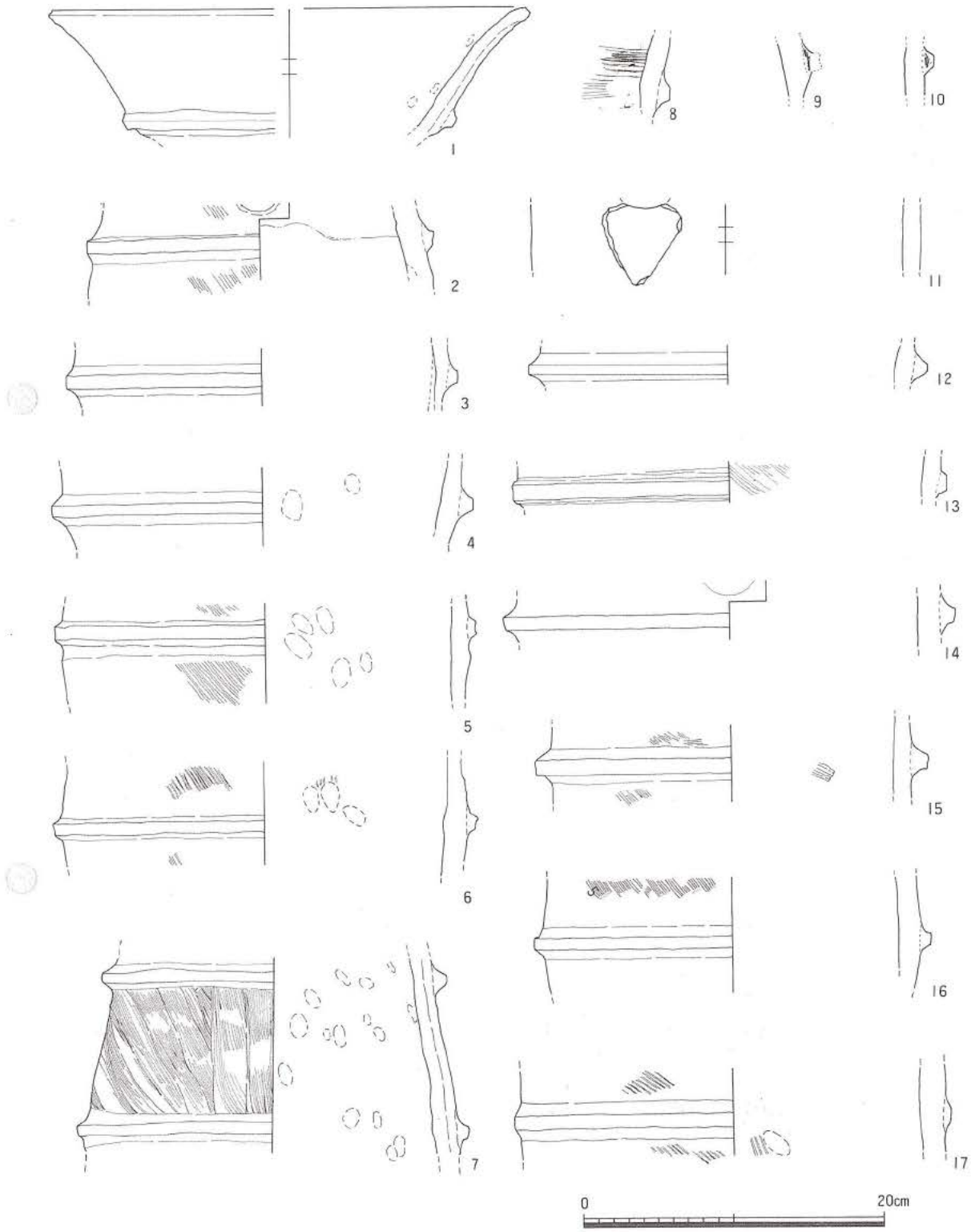
また、古墳時代のものとして次のものが出土した。27は、須恵器の台付碗であり7世紀中頃のものとみられる。おそらく、何等かの理由により混入したのであろう。28、29は古式土師器の甕口縁部である。30は古式土師器の器台脚部である。32は壺の底部か。33はミニチュア土器の底部であり、祭祀が周辺で行われていた可能性を示すようである。34は高坏の受部とみられる。35は須恵器の把手付鉢で、2本の沈線の間には波状文がみられる。36は須恵器の甕の体部である。38は壺の頸部で、波状文が何段にも施され、器内は海老茶色の焼成を見せる。39は器台の受部である。37は韓式系土器の甕の体部とみられ、格子状のタタキが施されていた。これらは直接埋没墳との関連はないが、28~34から古墳時代集落の存在と、27から後期古墳の存在も考えられそうである。そして、韓式系土器は、これまで市内では墓立古墳表採、下坂城遺跡からの出土例がなく、近隣に渡来系住民の集落跡の存在があるもの

弱くくの字状に曲がり、どっしりとした安定感がある。25、26は外反しながら上へとびるもので、外面のハケメ調整は明瞭であった。出土した埴輪は円筒埴輪のみで、形象埴輪はまったくみられなかった。埴輪は川西氏の編年に合せるとIV期で5世紀中頃のものと考え

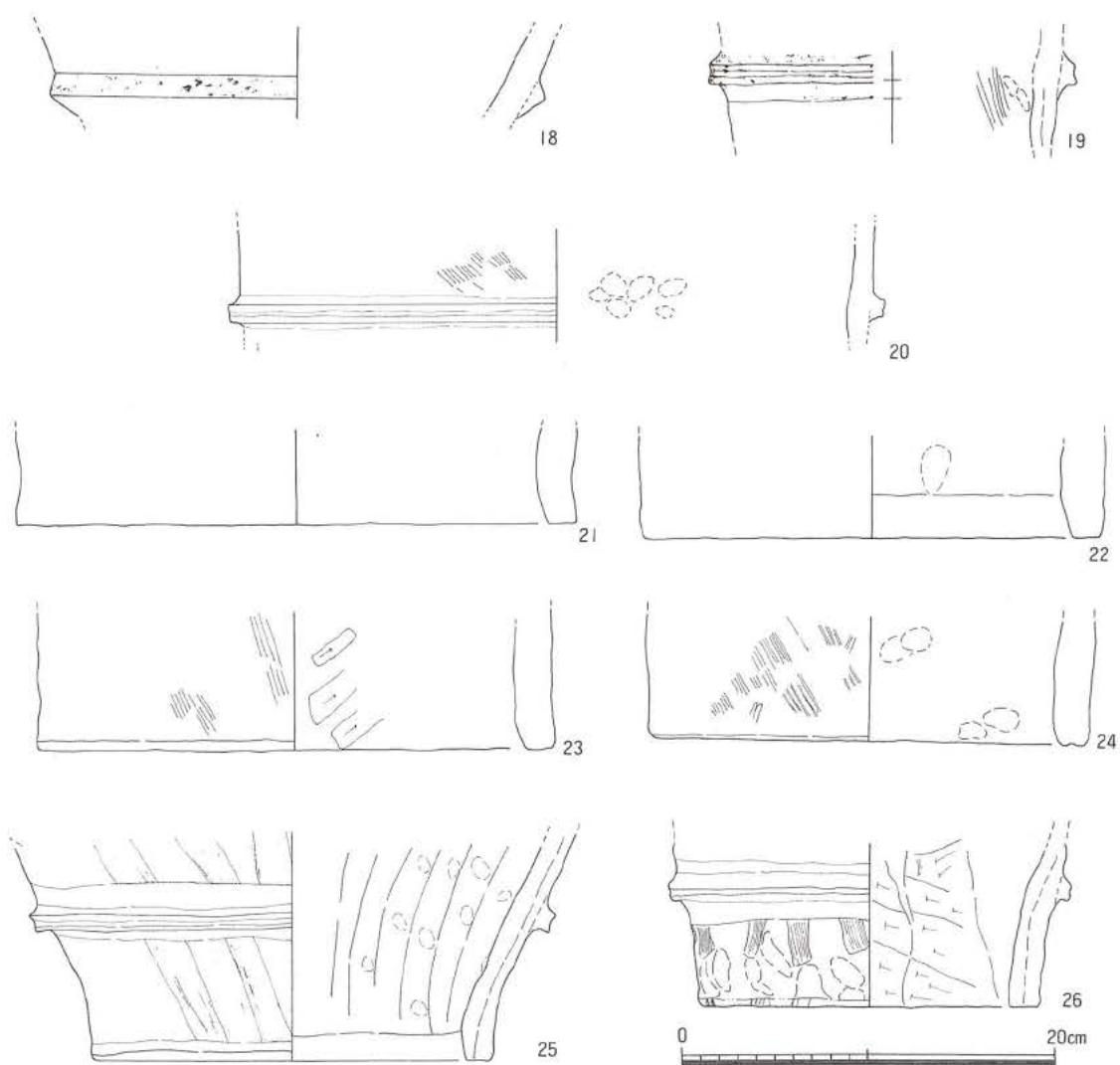


※確認調査のため現地地表よりレベルダウンさせた。

第3図 土層断面図



第4図 出土遺物 (No.1~No.17)



第5図 出土遺物 (No.18~No.26)

と思われる。

それでは次に中・近世期の遺物をみてみよう。40は須恵質系土器の碗である。41~46、48~59、62、65、66、69は灰釉陶器の碗であり、時期は12世紀中頃から13世紀頃のものともみられる。45、60、61、63、64は、灰釉の小皿とみられ、47は大皿のようである。67は土師器の小皿で、68は小さな鏝の付く土師製の羽釜である。出土遺物は、中世日常生活の食卓に欠かせないものばかりであった。近世の出土遺物は、トレンチNo.1のものが最も多く、70~74が陶器染付碗であり、71、

73は網かけ文が施されていた。71は網かけの単位が狭く、73に比べてコバルト青料の発色が濃いため、元禄期頃のもの、73は享保期以降のもので、どちらも古伊万里系の染付とみられる。73、78、79は陶器であり、75は急須の受部で、79は3方向に退化した獸脚を持つものであるが、用途不明である。香炉か。76は素焼の人物の頭部である。縁起もの可能性もあるが、伏見人形とも考えられる。以上のように多種多様のものが出土した。

(次号へつづく)